rongorongo

茨城キリスト教大学
文化交流学科

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科　〒319-1295 茨城県日立市大みか町６－１１－１　TEL 0294-52-3215　FAX 0294-52-3493

文化交流学科教員紹介

新学期なので文化交流学科の全教員に、一言メッセージをお願いしました。教員の意外な一面も……？09年度、実際に授業を受けた学生の感想集付きです☆賢く選んで、楽しく学ぼう！

掛川富康

自己表現

これまでも西洋文化史や西洋史で文化交流学科の人たちとはけっこう接触してきました。

今思うことは、学問も自己表現の一つの可能性なので、自分を表現することが、生き方においてかなり大切なのではないかということです。書物を通した勉強もそのうちの一つなので、これにこだわってはいません。この意味で目指すは私も学生の皆も、広い意味でのアーティストになることではないですか。

いま興味を持っているのは、第一次世界大戦頃の人たちの生き方、文化です。古代や中世も学生時代にやりましたので、本当は古い時代の方が好きなのですが。

それはともかく、お会いするのを楽しみにしています。

◆西洋史

先生自身の経験を踏まえた話がメインになっていて、文献の内容を理解するのは難しいがリアリティがある。先生と仲良くなれば、文献も借りられる。

◆西洋文化史

何本もの映画を通して、日本文化との違いを比べていきます。何気ない映像の中にもその具体例があって、見つけるのも面白かったです。

和泉　涼一

ユニークな研究

残念ながらこれといった趣味はありません。公園でイヌと遊んだり（または遊んでもらったり）、ぼんやりと風景を眺めていたりするのが好きです。高校時代は仏教の本ばかり読んでいましたが、いまの専門はフランス文学と文学の理論で、分かりやすく言えば本や映画をタネにいろいろな理屈を述べることです。この大学ではフランス語とゼミ（フランス文化研究）を担当しています。ゼミの学生さんの関心はじつにさまざまで、フランスの結婚事情や同性愛、移民、マンガやアニメ、などなどユニークな研究をしています。

本を読む、というのは知的活動のいちばんの基本だと思います。もちろん体験も大事なので、だから、「書を捨て街に出よう」ではなく「書を読み街に出よう」がみなさんへのアドバイスとなります。

◆フランス語Ⅰ

大学に入って初めてフランス語の勉強をしたのですが、DVD・本・音楽などフランスに関するものが身近にあるとは知らず、いつもびっくりしています。

◆地球ウォーキング演習

フランス文化について、主にやっていました。文化を知るために、フランス人の作品を見て毎回感想や考えなどを自分たちでまとめ、発表していたのが印象深いです。

ベトナム カンボジア 旅行記 初めての 異文化

2月9日から2月20日の12日間、シェムレアップのアンコール大学の協定調印式（5面参照）に同行した文化交流学科の学生18人が、ベトナムとカンボジアに行き、現地の学生や子どもたちと交流を深めました。

「ガツン！」とくる感覚

文化交流学科　2年次　飯樋　亜衣

今でも鮮明に思い出せます。あの12日間、経験した全てのことがはじめてでした。空港も飛行機も海外も、パクチーも星空もアンコールワットも物乞いの人達も、私の目に映り、体験した全部が新鮮で衝撃的でした。

私にとってこのベトナム・カンボジアの旅は人生初の海外旅行でした。

成田空港から飛行機に乗って6時間半、ベトナムの地に着き、空港から外に1歩出ると、そこはもう未知の世界でした。知らないものだらけで一気に不安になり、完全に雰囲気にのまれ、異国を楽しむ余裕なんてどこにもありません。

こんな空気の匂いも、すれ違う人々の顔も言葉も知らない。道路を埋め尽くすバイクの大群を見た時には「とんでもない

【4面へ続く】

10年5月号目次

1～5面
◆学科教員のメッセージ
1、4～5面
◆文化交流体験
5面
◆アンコール大学で調印式
6面
◆ひたち学フォーラム
6～7面
◆卒論発表会報告
7面
◆沖縄交流会報告
◆上田武先生からの手紙
8面
◆キャリセンから皆さんへ
◆編集後記

【1面 続き】

斎藤 聖二

計画と集中

誰もが多くの課題を抱えて生きています。大学生としての自分はどんな課題を中心に据えるのか、しっかり考え、そこに集中して毎日の生活を作れば、意義ある大学生活を送れると思います。四年間はあっという間です。計画と集中が大切です。まずは文化交流学科で一体何をやりたいのか、はっきりさせましょう。大学教員としての私の課題は、何よりより良い授業をすることと、その基盤となる深いオリジナルな研究をすることです。出来るだけの時間とエネルギーをここにかけられるよう努力しています。専門は日本近代の軍事史です。それを通じて近代化、隣国の植民地化、侵略、軍政関係など複数のテーマを念頭に東アジアの近代をめぐる諸問題を探求しています。

◆文化ネットワーク演習

タイピングのテストが大変だったが、今ではブラインドタッチも出来るようになりました。必ず使うことになるワードなどの技術が学べるので、後々便利です。

◆日本史

授業は厳しいですが、教科書にはない裏の歴史を学べます。歴史好きの人は、色々と感動すること間違いなしです。

瀧野 修

バッハとの出会い

初めてバッハの音楽と出会ったのは中学2年のとき。多感な少年の琴線に触れたのは、「G線上のアリア」の優美で魂を揺さぶるような旋律。家にあったLPレコード（今は死言？）に偶然針を下ろしたそのとき、半世紀にわたるバッハとの長い付き合いが始まりました。それ以来、バッハを生んだドイツという国の文化や歴史に興味を抱き続け、大学ではドイツ文学を専攻しました。専門領域は20世紀の文学、とくに戯曲作品ですが、現在は音楽や絵画などを含めて、広くヨーロッパの文化を研究対象としています。

今年度の担当授業は、「ドイツ語Ⅰ」「キリスト教概論Ⅱ」そして「演習」です。

◆キリスト教概論Ⅱ

以前、耳にした曲もありましたがバッハの人生を辿りながら聞くと、また違った味わいがありました。当時の音楽にも異なった点があり、その比較も面白かったです。

◆ドイツ語ⅡB

ドイツ語検定受検を目的としているけど、文法・発音など初めから復習できます。ⅡAと同時に履修するとテスト対策にもなるので、特にオススメです。

堀口 悟

専門づくし

専門が日本の伝統文化・日本古典文学（特に王朝物語文学）・日本語教育で、日本の伝統文化の中では特に「香道」「小倉百人一首」を研究しています。そして、「香道」と「競技かるた」は趣味で実践していまして、専門の研究に生かしています。

授業では、主に留学生に対する日本語の科目と日本人学生に対する日本語教育（外国人に日本語を教える方法）の科目を担当しています。今年は、「日本文学」も教えることになりました。ゼミでは、「日本の伝統文化」に関して、学生が自由に選択したテーマを取りあげます。双六、かるた、茶道、書道、相撲、剣道、武士道、日中食文化比較、日韓服飾比較など、毎年面白い発表があります。

◆基礎演習Ⅱ

自分で調べたり発表したりする時は、緊張して簡単ではなかった。しかし「香道」を実際に行わせてもらい、色々な経験をすることもできた。

◆日本語教育概論

日本語教員資格を取得するためには、必ず履修しなければなりません。毎回、面白くテンポもよく授業が進むので、楽しいです。授業内で、レポートを書くこともありました。

細谷 瑞枝

逆単身赴任

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。私の専門はドイツ語とドイツ文学、昔話の研究で、1年生の科目では「基礎演習」、「地球市民論」を担当します。今年から教務委員も務めますので、授業の取り方などで分からないことは気軽に訊きに来てください。別に仲間外れにされているわけではない（はず）ですが、文化交流学科の教員の中ではただ一人、研究室がシオン館の3階にありますので、3号館で途方にくれないようにしてくださいね。

さて、4月から家族がドイツに行ってしまい、逆単身赴任状態です。これを独身時代の再来とみるか、老後の予行演習とみるか……。ともあれ、これを理由にドイツに行けるのを楽しみにしています。

◆欧米の文学

私は正直、ヨーロッパの国々について興味はなかったです。しかし、授業でヨーロッパの物語や文学を学んでいくうちに、関心を持つようになりました。

◆基礎演習Ⅰ

時間をかけてレポートを作り、それをもとに発表するという内容で、時間をかけた分、発表後の達成感は大きかった。

猿田 知之

言語の面白さ

皆さん、こんにちは。日本語学・言語学・言語教育などを担当するサルタです。人好きする要素の少ない学問分野ですが、できるだけ言語研究の面白さと楽しさを、講義の中で伝えたいと思っております。

アフリカのスワヒリ語と日本語の比較研究をしてみませんか。

◆言語学

言語学というとどうしても難しいように感じてしまうが、基本的な部分から学べるのでより興味を持っ

佐々木　冬流

根っからの田舎者

冬流は「とおる」と読むのだが、みんな「トウリュウ」という。本名は徹。趣味は時と場合。無趣味にもなれる。北海道の片田舎に生れ、東京で10年すごし、鹿児島の片田舎に3年、更に茨城の片田舎で、もう何年になったのかな。東京でも世田谷や練馬の片田舎に住んだから、根っからの田舎者だ。

専門は日本文学だが、授業では文化・民俗・思想などを講義する。一見、温厚な中老？に見えるかもしれないが、教壇に立つのも今年が最後、きびしくしごいて有終の美を飾ろうと思う。

◆日本の歴史と文化
（日本文化史）

日本の文化について現代人が誤解している部分を正しく教えてもらえるので、面白かった。テストは、持ち込み可能の小論文形式。

◆日本文学Ⅱ

幽霊と言っても様々な種類があり、各々理由があってそのような姿になっている。その違いがあることを初めて知り、驚いた。

岩間　信之

熱い、東南アジア

新入生のみなさん、はじめまして。文化交流学科の岩間信之です。私の専門は人文地理学で、「まちづくり」や「観光」などを研究しています。趣味は、地元の人たちと一緒に面白い観光イベントを作ること、および貧乏旅行をすることです。ヨーロッパに留学していた時期もありますが、最近は東南アジアにハマってます。いやぁ、東南アジアは熱い！

大学は、型にしばられず自由な勉強を楽しめる最高の学び舎です。書物を漁るのも勉強、海外を放浪するのも勉強、バンドに熱中するのも勉強。興味のあることには、どんどん挑戦してみて下さい。

さて、ここでクイズです。左の写真は、どこの国で撮ったものでしょうか？　よーく観察すると、あちこちにヒントが隠れています。

◆比較文化論

現代の百貨店やコンビニなどがどのようにして成り立っているか、その裏側を見ることができたので面白かった。

◆観光学

観光というと良い部分しかないように見えるけど、その裏には多くの課題があることを知りました。そして、多くの観光地を紹介してくれるので、卒業旅行にでも行ってみたいです。

志賀　市子

文化の連続性

みなさん、こんにちは。私の専門は文化人類学で、主に中国（中華人民共和国）及び中国以外の国や地域に住む中国人、いわゆる華僑・華人と呼ばれる人々の宗教について研究しています。昨年1年間の海外研修の機会を得て、中国広州、香港に滞在していましたが、そこを拠点として、中国広東省汕頭（スワトウ）、台湾、ベトナム、タイ、シンガポール、マレーシアなどにも足を伸ばしました。東アジア、東南アジアに広がるこれらの地域を行き来していると、現在は国境が存在し、国家ごとに分断されていても、人々の文化は実は深いところでつながっており、連続性を持つのだなーということを実感します。授業の中では自分が実際に歩いて観察したことを、音やにおいや味も含めて、できるだけわかりやすく伝えていきたいと思っています。

＊昨年度は海外研修のため授業担当なし。［編集部］

森　謙二

新入生諸君へ

大学時代は、自分の人生にとって重要な時間です。大学生であるこの時が、これから生きていくための大きな〈資源〉を蓄えていく時期だからです。ここで〈資源〉というのは、友人・先輩・先生などの人間関係、体験・経験などの目に見えない「財産」、そして学力や知識も重要な〈資産〉を形成することになります。この〈資源〉をどれだけ蓄えることができるか、それがあなたの一生の生活（老後の生活まで含めて）を決めると言っても過言ではないだろう。

「今」を生きるためには「お金」が必要だと思うかも知れません。しかし、「今」を楽しく生きることだけを考えるのではなく、将来にどのような備えをしていくのか、考えてみませんか。

◆社会学

「家族」というテーマを授業内で扱うことがありますが、内容が深く難しいです。時には、予習をする必要もあります。

◆民俗学

毎年行われている「祭り」が昔、どのような目的を持っていたのかを知りました。また、茨城県民ならではの特徴があることも、とても興味深かったです。

染谷　智幸

高潔な人柄？

研究分野は江戸時代の怪すぃーアンダーグランド文化ですが、韓国や東南アジアにも最近は関心が広がっています。

2年前に、九州の古本屋さんで、韓国のエロチック漢文小説（百五十年～二百年前のもの）をぼくが発見したんですが、それを今度韓国で出版することになりました。欲しい人はあげますよ。でも、漢文か韓国語が読めないと理解できません。出版と同時にこの本（原本）をソウル大学に寄贈したところ、向こうの先生から「染谷先生の高潔な人柄に感謝する」とのお礼が来ました。エロチック小説を寄贈した高潔な人というのはなかなかアイロニカルですね。なお、4月から図書館長になりました。図書館に来たら、図書館長室に寄ってください。

◆日本文学ー

日本文学とは何か？というのを根底から知ることができます。文学といって堅いイメージがあるかもしれませんが、動画や漫画なども出てくるので気軽に学べると思います。

◆異文化間コミュニケーション

韓国からの留学生と一緒に、在日問題について取り組みました。韓国のことやそれに関したDVDを多く見るので、興味がある人にオススメです。

藤田　悟

低血圧な人柄？

高潔ではなく低血圧の藤田です。「O型が服を着て歩いているみたいだ」といわれるぐらいの典型的O型らしいです。自覚症状はまったくありませんが。

文化交流論や比較教育のゼミなどを担当しています。その他に、学科の新聞 rongorongo 編集、カンボジアでのボランティア活動、学園祭でのアジアンバザールなど、課外活動の方もけっこう忙しくしています。

◆情報ネットワーク演習

日本・中国・韓国の3国の学生が組み合わせのゼミ。「比較教育」というテーマで、学科の名に合う国際的なコミュニケーションができて楽しかった。教育に関して調べて発表する中で、新たな発見もある。

4月から国際交流部長でもあります。

石岡の八郷で友人たちと有機農法の田んぼで米作りもしています。

一番最近のマイブームは Linux。まだまだ試用の段階です。

◆文化交流論

世界における日本の今の姿を、考えることができた。「文化交流とは、一方通行ではない」ということを教わり、印象に残った。

【1面から続き】

国に来てしまった」と後悔しました。母からのメールを見て「帰りたいな…」とも思いました。ただただ、同室の友達の「明日からは絶対楽しいから！」という言葉を半信半疑に、不安と一緒に眠ったのが私の海外初日の思い出です。

しかし、2日目以降は初日の不安が嘘のように本当に楽しいことばかりでした。友達や先輩と毎日笑っていた記憶があります。とにかく、現地の人との会話が、目に映る景色が、知らなかったことを知っていくのが、自分が経験することの全てが、楽しかった。

特に自由行動の町歩きは忘れられません。目的地も決めず、ご飯を食べるとなれば「現地人が多いから」という理由でお店に入ってみたり、「美味しそうじゃん」という理由でわけのわからない料理を注文してみたり、これも全て超チャレンジャーな友達と行動を共にした結果ですが、今思い出してもすごく楽しかった経験です。

また、私が経験したのは楽しいことばかりではありません。同じくらいに悩み、泣き、考えさせられる経験もしました。もしかしたらそれは、「楽しい」以上に私の心に深く残っているかもしれません。

カンボジアで目の当たりにした現実は、私の今までの常識を覆すのに十分なものでした。どこまでも広がる荒野に痩せすぎた牛がポツンといる。今にも壊れそうな木造の建物に人が住んでいる。体の一部を失った人が何かをくれと頭を下げる。遺跡や町には生々しく銃痕が残り、自分よりも年下の子供が観光客を相手に物を売る。「こんな国だ」ということは、頭で理解しているつもりで訪れたカンボジア。

しかし、実際にあの光景を目にした時は、後ろから頭を思いっきりガツン！と殴られたような感覚になりました。それほどその現実は、私にとって衝撃的なものでした。

また、その光景について考えれば、浮かんでくるのは「どうして」「なぜ」「なんで」の疑問ばかりで、その度に、頭を抱えて悩みました。結局、「正しい」答えは見つかりませんでしたが、悩み考え続けた経験が出来て良かったと思います。それは、実際に行って見たからこそ出来た経験だからです。

「百聞は一見に如かず」という言葉があります。まさにその言葉がピッタリな旅だったと思います。楽しい経験も辛い経験もたくさんしました。

ベトナムで見た星空は一生忘れないだろうし、カンボジアで触れた人々の優しさは本当に嬉しかった。子供達の笑顔は今思い出しても温かい気持ちになります。体験した全部が新鮮で衝撃でした。過ごした1日1日全てに思い出があります。10代最後にあの地にあのメンバーで行けて本当に良かったと、心から思う旅でした。

相手の気持ちになって

文化交流学科　4 年次　安嶋　彩

国も言葉も文化も違うから

2月9日から20日の12日間、ベトナム・カンボジアを旅してきました。初めての海外がベトナム・カンボジアということで、両親や友人には「そこは安全なの？」「食べ物は大丈夫？」など、ものすごい心配をされました。自分自身、多少の不安はあったものの、「文化交流学科にいるのだから文化交流しなくてどうする！」と自分自身を奮い立たせて旅行に参加しました。

初めて乗った海外便の飛行機の中で、CSの人に使ったたどたどしい英語、文法がしっかりした英語を使うよりも、必死に単語を並べた英語や身振り手振りの方が案外伝わってしまうコミュニケーション、現地で周りから聞こえる日本語ではない言語、アンコール・ワットから見た朝日、プノンバケンからみた夕日、地平線まで何もない風景、現地の大学生との交流、厳かな雰囲気で行われたアンコール大学との調印式、不思議だけれど嫌いではない現地の匂い、最初は警戒していたけれど意外と親切でフレンドリーな人達、童心にかえってバテるまで遊んだ孤児院（*）・小学校、何もかもが初めての経験で新鮮で、慌しくも充実した毎日でした。

現地でしか味わえない感動は、何ものにもかえられないものだと今日本に帰ってきて実感します。旅先で出会った人たちのことも、忘れられない思い出の一つです。

その中でも特に印象深かったのが、ベトナムの大学生との交流と、カンボジアの孤児院・小学校で出会った子供たちでした。

ベトナムの学生とは一緒に年越しの花火を見たり、ヤギ鍋を食べたりなど本当に親切で、それでいて勉強熱心なところに感動しました。日本語で普通に会話ができ、冗談を言い合えたり、日本語の意味を教えたり……、逆に自分は今まで英語を何年間習ってきたのだろう、ベトナムの歴史やベトナム語をなぜ勉強しなかったのだろうと恥ずかしく思いました。

カンボジアの孤児院・小学校では、最初戸惑いがちな自分たちを子供たちが手を引いて外に連れ出してくれたこと、屈託のない笑顔で炎天下サッカーをしたこと、いつまでも隣に居て最後の最後まで自分の右手を離そうとしなかった小さい手が、忘れられません。

自分はもしかしたらもう会わないのかもしれない、でもただ単純にまたあの子達に会いたいと思いました。けれど自分たちはこの子たちに何が出来るだろう、何をしてあげられるだろう、「してあげよう」とするよりも、「してもらいたい」ことはなんだろうと、でも自分はあの子たちになれない、日本に帰国したらこの子達も思い出の一つになってしまうのだろうかと葛藤しながらベトナム・カンボジアの旅は終わりました。

国も言葉も文化も違うから悩むことはたくさんあるけれど、国も言葉も文化も違うから面白いことがたくさんある。この旅で学んだことはたくさんあり、これからの学生生活や人生で活かせることもあると思います。この旅は自分にとってかけがえのない旅である以上に意味のある旅になったと思います。

またこの旅で本当にお世話になった先生方、友人、先輩方、そして両親にこの場を借りて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

どの人が日本人？　ベトナム人？

＊現在、日本の福祉関連用語として「孤児院」という用語は使われていません。「児童養護施設」というのがこれに当たるようです。また、「孤児（院）」という言葉に差別的な意味合いを感じる人もいるようです。しかし、「中国残留孤児」といった用語もあります。ここでは、カンボジアの現実の必要から生まれた施設として、現地で英語で話すときに使われる orphanage の訳語として「孤児院」という表現を使っています。

アンコール大学との調印式

2010 年 2 月 17 日、アンコール大学と本学との友好協力協定の調印式典がシエムレアップにて和やかなムードのうちに執り行われました。左の写真は、調印式典の様子、現地に赴いた先生が撮影されたものです。また、昨年に引き続き、ソーラン節を文化交流学科の学生総勢 18 人がアンコール大学の学生や先生方の前で披露し、盛大な拍手喝さいを頂きました。

左から、シン・ナム総長と本学の小松美穂子学長

本学科の学生たち

第三回ひたち学への招待・日立市少子化対策フォーラム
―少子高齢化社会と〈ひたち〉―

1月23日、本学と日立市の共催で行われた講演会にたくさんの方が訪れました。講演されたうち、ここでは2名の方の感想を紹介します。

左から、小池司朗氏、 渡辺秀樹氏、長山靖生氏、森謙二氏、鈴木さつき氏、岩間信之氏、大高ひろみ氏

渡辺秀樹氏の「少子化と子育て」の報告では、各国の子育てに対する価値観の違いを知ることができた。特に印象に残っているのは、「充実してほしい子育て環境」の項目である。

アメリカでは第二位に「子どもを預けられる施設」が挙がっており、働く女性や意欲のある専業主婦の要求していることが明らかになった。アメリカでの実態をあまり知らなかったが、日本でも核家族の家庭は、保育所の受け入れ待ちで子どもを預けたくても預けられないことを考えると、各家庭への経済援助も大切だが、そのような状況の改善が先ではないかと思った。

渡辺秀樹氏

慶応義塾大学文学部教授
現在の産業化以前にみられた、多くの大人が子どもに関わる複雑な養育環境の意義をとくに社会学的な視点から議論された。

鈴木さつき氏

日立市子ども福祉課少子化対策室
日立市の少子化対策子育て支援について講演された。少子化の進行とそのの背景にある要因、国の少子化対策の取り組みの経緯などを講演された。

また、鈴木さつき氏の「日立の少子化対策、子育て支援について」では「日立子どもプラン21」の報告がなされ、私はその中でも、地域子育て支援拠点事業に注目した。

これは、子どもを遊ばせるための広場や相談所の設置のことで、平成21年度末には市内で13箇所の設置が見込まれている。

その他にも、一時保育の預かり事業や、ボランティアグループによるおもちゃライブラリー事業が行われている。

このような取り組みがされていることを知らなかったが、前述した「充実してほしい子育て環境」などの要求に応えることが改善の大きな一歩となると思う。子育てをこれからする女性としてだけでなく、地域社会に住む一員として、目を向け、積極的に参加するなどできることをしていきたい。

［編集部・佐々木］

卒業論文発表会

最も優れた卒業研究に贈られる
ICアカデミー賞を受賞した卒業生の感想を紹介します。

文化交流学科09年度卒業生　野沢　恵美

必ず自分の成長が感じられる

私は堀口先生のゼミで「カタカナにおける日本の芸術性」について卒業論文（卒論）を書きました。カタカナが書道として確立していかなかった経緯や、中国から渡ってきた書道が日本で独自の芸術となり世界へと交流していくという研究をしました。

今年は去年と違って、卒論が終わったと同時に卒論発表会があり、私はその発表会に参加しました。この卒論発表会は本当に苦しかったし、自己嫌悪に陥ることもありましたが、私自身まだまだ勉強が必要だと実感させてくれた場でもありました。納得がいかなかったことも多々ありましたが、文化交流学科の先生方や学生の皆さんの前で発表できたことは誇りに思います。

この卒論を通じて学生の皆さんにただ一つ言えること、それは、卒論は書くべきだということです。文化交流学科は卒論が選択制ということで書かない人が多く、また、4年生は就活や勉強、サークルと忙しいかもしれませんが、書くことで自分に自信がつき、決して悔いはないと思います。

大学4年間の集大成として取り組むべきだと思いますし、色んな先生の意見を聞くことが重要であると感じました。卒論を書き終わった後には、必ず自分の成長が感じられるはずです。

今回いただけた賞も、私一人の賞ではなく、卒論に取り組んだみんなの

賞だと思っております。

最後に私を応援し、支えてくれた友達、貴重なアドバイスをくださった先生方ありがとうございました。学生の皆さんも、悔いのないよう有意義な大学生活を送ってください。

野沢恵美さん（左）卒業旅行でフランスに

沖縄交流会

1月16日に本学と沖縄大学の交流会が、今回は沖縄で行われました。編集部の私も沖縄に行きましたが、沖縄大学の学生の皆さんが披露してくださったエイサーの踊りは、見ているこちら側も一緒の輪に入りたくなるような気分にさせられました。

また今回は、交流会以外にもう一つ別の目的で、沖縄に訪れました。それは、沖縄で起こった戦争について勉強しようということです。私は、この沖縄交流会を取材する以前に、『ひめゆり上映会』を取材し、その中でロンゴロンゴ編集者兼、上映会関係者の記録（活動の様子を撮影する係）として上映活動にも参加させて頂きました。

ひめゆり平和祈念資料館

この『ひめゆり』という言葉を耳にする方は少ないと思いますが、『ひめゆり』とは第二次世界大戦時中に、沖縄の沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の教師・生徒で構成された看護隊のことです。また『ひめゆり』の由来は、それぞれの学校で出していた学校広報誌の名前、「乙姫」と「白百合」を併せて「ひめゆり（姫百合）」になったそうです。

私も勉強会に参加する以前は、この『ひめゆり』の由来を知らなかったのですが、この言葉の由来が広報誌であり、またこの広報誌の読者が、主に学校の学生を対象にしたものであるのだと知り、私も学生や教員を対象に広報誌を編集する者として、とても親近感を感じました。

現在、基地移設先として取り上げられている、辺野古のキャンプシュワブにも行きました。そこで、この勉強会を通じ「沖縄に基地は、本当にあってよいものなのだろうか？」と何度も自分の心の中で問いただしました。

基地移設がどのような形になるかは、私も分かりませんが、沖縄で起こった事実を本土の我々も知るべきではないかと思います。

［編集部・長谷川］

このフェンスの向こうがキャンプシュワブ（沖縄県名護市）

前号の記事に寄せて

文化交流学科元教員　上田　武

文化交流学科設置時の教員で、定年退職後は山梨県の富士川谷でお暮らしの上田武先生からお手紙をいただきました。

「ひめゆり」は何度も映画化されています。その第一作・今井正監督「ひめゆりの塔」（津島恵子、香川京子、岡田英次ほか出演、1953）に学生時代の上田先生が出演されたそうです。先生のお許しを得て、お手紙をご紹介します。

rongorongo 編集部御中

拝復

一月十六日付けの、懐かしい多賀局の消印が押されたrongorongo十六号、有難く読ませていただきました。

当紙は、『文化交流学科』が創設された公元＝西暦二千年、学生諸君はもとより、先生方も「文化交流学」とは何か、手探りで探り始めてからしばらくして、藤田先生を中心にして発刊され、さらに年を重ねて、編集が学生の手にゆだねられ（何号でしょうか？　WEB版を照覧してください）、年毎に後輩に伝えられた歴史を持っています。

年度ごと内容には変化がありますが、文化交流学科の具体的活動、近隣諸国からの（あるいは近隣諸国への）留学生からの体験の感想、各先生へのロングインタビューの三点が目玉となっています。

毎号興味津々たるものがありますが、本号では例えば、去る十二月十九日、学生主催での『沖縄戦についての映画（ひめゆりの塔）』上映の記事が、自分の体験と重なって印象に刻まれました。

一九四五年（昭和二十年）六月に戦場となった沖縄本島で編成された「姫百合部隊（女子高等女学校、女子師範生中心）」の悲劇を主題にし

た内容でモノクローム、色彩化など何回か映画化されています。

その第一回、東映製作の作品に私は出演した記憶があります。（といっても学生三年のアルバイト出演）。破産寸前の東映が乗るか反るかの社運をかけての作品で、連日連夜の撮影でした。夏の沖縄が舞台ですが、それを一九五三年の十一月中・下旬、シャツ一枚、梅雨（実は水道の放水）に打たれ、傷つきさまよう日本兵の一人という役で、ずいぶんきつい撮影でした。

この映画は日本列島を巻き込むヒットを遂げ、有名女優を何人も世に送り、再再上映されて参りました。

昨年十二月二十四日、沖縄本島名護市で、基地反対派の市長が激戦の末選出され、今も日本国民に鋭い問題を提起しています。

また留学生の感想、多彩ですが、天津師範大の辺学楠さんの文章は、ごみの分別、交通機関の便利さ、学生アルバイト、教育実習、正座など、日本にあって中国にはない風俗習慣にかかわることがてきぱきと指摘され感心させられました。（正座は漢代まであって、それ以後見られなくなった例ですが。）

私の中国滞在は二千五年で、突如流行し始めた非典型肺炎（日本ではSARSと呼ばれた）のため、学生諸君と一緒に三カ月で打ち切らざるをえませんでしたが、以上のような視点を確立すると一年に満たない留学も、ずいぶん豊かになることを痛感いたしました。

以上かいつまんだ記述で申し訳ありませんが、次号も楽しみにいたしております。

藤田先生はじめ文化交流学科の先生方に、くれぐれもよろしくお伝えください。

山梨の山中、富士川谷にて

上田　武

「将来のこと　今から考えてみようかな？」

キャリア支援センターから みなさんへ

文化交流学科担当　藤田　聡美

1年生のみなさん、入学おめでとうございます。これからの4年間に心躍らせている方、不安を抱えている方など様々だと思いますが、キャリア支援センタースタッフ一同、心よりお祝い申し上げます。

キャリア支援センターと聞いて、「私たちにはまだ関係ないや」と思う方が多いでしょうか？キャリア支援センターではEQやR-CAPといった科学的アセスメントを使い、少人数制の顔が見える大学であるメリットを活かして、1年生から4年間を通じた、段階的なキャリアサポートを行い、一人ひとりの夢と成長を見守りながら、希望を叶える就職を支援しています。

個性豊かなスタッフが全部で7名。茨城キリスト教大学、又は高校の出身者もいますので、キャリアの相談はもちろん、学校生活に関する相談も大歓迎です。

今、社会が求めている人は、自分で考えて行動出来る人、自信を持って語れるものを身につけた人です。それには大学で良い4年間を過ごし、これだけは誰にも負けないと言える成果を得ることが大切だと考えています。

キャリア支援センターでは、その機会の一つとして、スタッフが塾長となり開催している『男塾』『女塾』主催の富士登山や、百キロ徒歩の旅というボランティア活動に一緒に参加したりなど、大学での様々な経験を増やすためのサポートも行っています。

キャリア支援センターはシオン館一階

通称「キャリセン」。単に就職指導や斡旋に留まらず、低学年からのキャリアや職業観を育成するための支援、キャリア支援講座を積極的に取り入れ、学生のキャリア形成支援を拡大し4年間を通じてサポートしています。

キャリア支援センターはシオン館1階にありますので、学内を見て回る際にはぜひ遊びに来てくださいね。

キャリセンでカウンセラーに相談する学生　　パソコンで面談の予約もできる

rongorongoは年4回刊行予定です。今回もひどく遅れたので、体制を立て直す計画です。

編集部員を募集しています。関心のある人はfujita-s@icc.ac.jpにご連絡ください。携帯メールでもOKです。正式のスタッフにはアルバイト代も支給されます！［藤田］

入学記念行事速報！

5月8日から9日にかけての週末、泊りがけで入学記念行事が行われた。新入生全員出席。8日午前はつくばエクスポセンター（「ゲームが面白かった」）、9日午前は茨城空港（「見学者がいっぱい」「ハイテクのガラスに感心」）を見学した。

が、なんといってもイベントの中心は8日午後の文化交流研修会だった。筑波在住の外国人の方々や本学に学ぶ留学生に、数名のグループでインタビューを行い、まとめを全体の前でプレゼンするという活動だ。

参加してくれた外国人は、中国、韓国、台湾、ブラジル、ケニア、フィリピン、スリランカ、タジキスタンと色とりどり。民族衣装を着て参加してくれた人もいた。

プレゼンを投票で審査した結果、タジキスタン組がトップになった。

最後に斎藤学科主任がゲスト全員に「母語で話して」とリクエスト。8つの言語の響きをいっぺんに聞くという特別に贅沢な体験ができた。

参加学生の感想は次号で紹介する予定。［藤田］

ロンゴロンゴとは南太平洋ポリネシアのイースター島で昔作られていた「物を言う板」です。この板には文字のようなものが書いてありました。この文字はまだ解読されていないそうですが、これは島の人々に歴史や情報を伝える板でした。

編集後記

新しい学期が始まり、約1カ月がたとうとしています。新入生の皆さんにとっては、大学生活で初めての1ヶ月であるかと思いますが、私たち4年生にとっては、早くも1ヶ月過ぎたという感じがします。また、最後の学年と言うこともあり、やり残しがないように、残りの学生生活を楽しみたいです。［長谷川勇］

四季を楽しめることが日本の良さだといいますが、今年は寒い日が続き、春の陽気を楽しめなかったように思います。そうかと思えば、日中は夏のように暑くなったり、季節の切り替わりがはっきりしてきたように感じるこの頃です。

前期試験が終われば夏休みですね。学生としての夏休みも今年で最後になると思うので、これから予定を立てるのが楽しみです。［佐々木美和］

この間夜に、カエルの鳴き声と共に「カァー」とカラスのような声が聞こえてきて、えっ夜にカラス？と思いましたが、ゴイサギという鳥であることがわかりました。

時折、自然の音楽のように鳥の鳴き声が聞こえてきますが、鳥の姿や生態と一致して知るとおもしろいなと感じました。［松本千里］